

(公益財団法人)川崎市国際交流協会

やま だ おさ みつ

山田 長満 新会長

インタビュー

可能性と魅力にあふれた川崎を、日本の国際交流の中心にしたい



山田会長プロフィール

昭和22年(1947年)生まれ。日本大学商学部卒業、慶應義塾大学大学院商学研究科修士課程修了。現川崎市商工会議所会頭。(公財)山田長満奨学会理事長。(一財)日本起業家協会理事長。株式会社経理バンクホールディングスほか。今年3月末、(公財)川崎市国際交流協会会長に就任。哲学としているのは、天台宗・最澄の言葉:「亡己利他(もうごりた)」(己を忘れて他を利する。自分のことは後回しにして、まず人に喜んでもらえることをする。そこに幸せがある。)

Q1. 国際都市として発展しつづける川崎にとって、大切なことは何ですか？

川崎は、陸・海・空に恵まれた、国際産業都市で環境先進都市、イノベーション都市です。東京と横浜という二大都市に挟まれた通過点ではなく、川

崎こそが、東京と横浜の中心であり、日本列島のハブだと考えています。

目指すのは「日本一働きたいまち・川崎」「日本一住みたいまち・川崎」。

ビジネスだけでなく、音楽・スポーツ・芸術など、文化の中心となる国際的な人材を集め、地域の人々との交流を活性化させることが大切だと考えています。

Q2. 個人的にも、さまざまな留学生支援を継続されていますが、そのきっかけや印象的なエピソードがあれば教えてください。

26、7年前に大学改革研究チームの知り合いに誘われて、ラオスとベトナムに行ったのですが、両国の人々の真面目さや純粹さ、親日であること、また、それぞれの社会から感じる輝きに感銘を受けました。

それから2年後の平成元年、世界平和に貢献する人材育成を目的に、

(公財)山田長満奨学会を創立しました。海外では、米・オレゴン大学の言語センターへの貢献や、ラオス、ベトナム、カンボジアの国立大学などの学生に奨学金を支給するほか、国内でも毎年日本人と留学生の支援をしています。

支援を初めて25年が経ち、今では

2万人以上の青年(OB・OG)が世界各地で活躍しています。日本で博士課程を修了したカンボジアの兄弟は、日本の大学を参考に、祖国に戻って「プノンベン科学技術大学」を設立しました。これらの支援活動は、私のライフワークです。

Q3. (公財)川崎市国際交流協会会長としての抱負を聞かせてください。

公私ともに親しくさせていただいた、尊敬する寺尾宇一前会長のご意志を受け継ぎ、また、(公財)川崎市国際交流協会が設立された時の原点に立って、社会的使命を達成したいと考えています。

協会と川崎商工会議所が連携することで、双方の発展に貢献したいし、今まで以上に市内の外国人コミュ

ニティを応援していきたいですね。川崎市の国際交流を活発化し、協会の事業や川崎市国際交流センターの施設を、より多くの外国人市民に活用してもらいたいと思っています。具体的には、協会の市民登録ボランティア制度を強化し、インターナショナル・フェスティバルをさらに充実していきたいですね。

来年3月には、ミュージア川崎シンフォニーホールで、商工会議所と商店街が連携した川崎国際音楽祭が企画されています。7つの区で予選をしますので、市内在住約30,000人の外国人市民の皆さんにもどんどん参加してもらって国際大会になるよう、協会も一緒に盛り上げていきたいです。

カラオケでは舟木一夫さんの歌が十八番だという山田会長、明るくエネルギーで、ユーモアにあふれた親しみやすいお人柄と、「日本人と外国人が連携することで、双方ともに発展したい」というお話がとても印象的でした。

(取材・文:編集ボランティア 森 千里)